

相づちに対する大学生の意識

堀口 純子 (桜美林大学)
horisumi@obirin.ac.jp

【要約】

本研究は、反応が少ないとか、人の話を聞かないと言われている大学生たちが、友だちとの会話における相づちをどのようにとらえているかということ进行调查したものである。調査の結果から、学生たちは友だちとの会話において相づちを使い、なぜ相づちを使うかという、話し手としての経験、聞き手としての経験、話すのが不得手とか聞くのが好きなど自分の事情、相づち観など、様々な理由があり、コミュニケーションを円滑に進めるためには相づちが有効であるという学生たちの意識を明らかにすることができた。

1. はじめに

最近、「学生と話をすると、反応が少なく、話しづらい」(高岸 2012)とか、「人の話を聴かない・聴けない学生が目立つようになっている」(穂田 2009)というような報告がある。

日本語で会話をする場合、話し手は聞き手が相づちを打ってくれると話しやすく、打ってくれないと話しにくい。相づちによって、聞き手の理解や関心を判断し、話を進めるための力を得たり、話の方向を修正したりすることができる。また、聞き手は適度な相づちを打つことによって、話し手とともに会話の成立に貢献している。すなわち、日本語の会話においては、相づちが重要な役割を果たしているといえる。

ところで、学生たちは朝から晩までメールのやり取りをし、人とのやり取りのほかに、情報の入手にも、買物にも、わからないことを調べるのにもインターネットを使用している。すなわち、人と話さなくても生活ができ、人と話す必要がなくなっているのではないかと思われる。また、学生たちが離れることができないメールは、相づちが無くても成立する。

このような学生たちの現状を見て、

- 1) 学生たちは相づちを使わなくなっているのだろうか
という疑問が起こり、さらに、
- 2) 学生たちは相づちに対してどのような意識を持っているのだろうか
ということを明らかにする必要があると考えた。

2. 友だちに対して相づちを使うか

東京にある私立の桜美林大学の2～4年生の学部学生たちに、「友だちに対して相づちを使いますか」という質問をしたところ、表1のような結果であった。

表1 友だちに対して相づちを使うか

	日本人学生 (61名)		留学生(女性) (4名)	合計 (65名)	
	女性(45名)	男性(16名)			
よく使う	9	7	0	16 (25%)	64
使う	36	9	2	47 (72%)	
時々使う	0	0	1	1 (1.5%)	
使わない	0	0	1	1 (1.5%)	1

調査協力者は、日本人学生 61 名（女性 45 名、男性 16 名）、留学生 4 名で、全部で 65 名である。

一番多かったのは「使う」という回答で、女性 36 名、男性 9 名、留学生 2 名で、全部で 47 名(72%)であった。「よく使う」という回答は 16 名(25%)で、留学生で「よく使う」と答えた者はいなかった。「よく使う」の中には「よく使う」のほかに、「必ず使う」、「とてもよく使う」、「ひんぱんに使う」、「たくさん使う」、「どんな状況でも使う」、「わりと使う」というような回答が含まれている。

日本人学生 61 名は全員相づちを使っていて、そのうち 16 名（日本人学生の 26%）は「よく使う」ということが明らかになった。留学生は「よく使う」という回答はなく、4 名のうち 2 名が「使う」、1 名が「時々使う」であった。調査協力者 65 名中「使わない」と回答したのは 1 名で、それは留学生の回答であった。

3. 相づちを使う理由

日本人学生 61 名は全員相づちを使うと答え、留学生 4 名中 3 名が相づちを使うと答えたが、では、なぜ使うのかという「相づちを使う理由」について、1. 話し手としての経験から、2. 聞き手としての経験から、3. 自分の事情に由来する理由、4. 相づちに対する考えに由来する理由、の 4 つに分けて見ていく。

3-1. 話し手としての経験から

日常的に友だちと会話をする中で自分の話に対して相手がどのように反応をしたかを思い返したり、桜美林大学の「オーラルコミュニケーション」という授業で「相づちを打たないで相手の話を聞く」という実習で話し手になったときの経験を振り返ったりしながら、自分が話しているときに感じた相手の相づちに対する印象を述べた回答が多く見られた。すなわち、自分が話し手だったときに、相手の相づちがない場合とある場合に、それぞれどのように感じたかということをお返しして、話し手の立場から相づち使用の理由を考えたものである。

3-1-1. 相づちがないと

自分が話しているときに、相手から相づちがないと、「不安になる」と「心配になる」という回答が多く見られた。「不安」や「心配」の具体的な内容は、次のようなものである。

- ① 聞いてくれているのかと不安になる
- ② 自分の話がつまらないのかと不安になる
- ③ 私とは違う意見だろうかと不安になる

④ 怒っているのではないかと心配になる

このように、聞き手から相づちがないと、「相手は聞いているのか」、「相手はつまらないのか」、「相手は違う意見か」、「相手は怒っているのではないか」と、相手の心情を慮って不安になった経験があるため、自分が人の話を聞く場合には話し手が不安にならないように相づちを打っているということである。

さらに、自分が話しているときに、相手から相づちがないと、上で述べた不安や心配だけではなく、どのような気持ちになるかという話し手としての心情を吐露した回答も多く見られた。具体的な記述を以下に示す。

⑤ 聞いてくれていないと思い、嫌な気分になる

⑥ 話していて楽しくない

⑦ 話していてつまらない

⑧ がっかりする

⑨ すごく悲しく傷ついた

そして、このような気持ちになると、次の記述に見られるように、話す気も失せていくようである。

⑩ 話している意味があるのかと思う

⑪ 興味がなさそうで、話す気が失せる

⑫ この子には話したくないと思う

相づちがないと①～④のように相手の気持ちが気になるだけでなく、自分の気持ちも⑤～⑨のように「嫌な気分」、「楽しくない」、「つまらない」、「がっかりする」、「悲しく傷ついた」気持ちになり、話す立場にいながら⑩～⑫のように「話す気が失せる」、「話したくない」というように、話し手としての意欲を失くしてしまうのである。

これらの記述に見られるように、自分が話しているときに相手の相づちがないと、不安になり、楽しくなくなり、話す気がなくなり、楽しく会話を運ぶことができないというような経験から、学生たちは相づちは必要であると考えているようである。また、相づちがないと「話すリズムがわからなくなり、話しにくい」というように、相づちがないと話し手と聞き手でテンポよく会話を進めていくことができないという経験からも、相づちの必要性を感じているようである。

3-1-2. 相づちがあると

上にあげた例とは逆に、相手の相づちがあると、次の記述に見られるように、自分の話に対する聞き手の理解や感じ方を読み取ることができるという回答も多く見られた。

① 聞いてくれていることがわかる

② 理解してくれていることがわかる

③ 相手が会話に集中してくれていると感じる

④ 相手が自分の話に興味があることがわかる

⑤ 自分の言っていることが伝わっていると感じる

このように相づちがあると、聞き手が「聞いている」、「理解している」、「集中している」、「興味がある」、聞き手に「伝わっている」というように聞き手の状態がわかるという経験があるため、自分も人の話を聞く場合は、聞きながら相づちを打っているということである。上の①②③にある「くれている」(下線部)という表現は、聞き手に対して「ありがたい」と感じている話し手の気持ちを反映した

ものであろう。

相手の相づちによって自分の話を「聞いてくれていることがわかる」と、次のように、気持ちも前向きになる。

- ⑥ うれしくなる
- ⑦ 好意的になる
- ⑧ 相手の相づちで気持ちが盛り上がる
- ⑨ 気持ちよく話せる
- ⑩ 話していて心地よい
- ⑪ 話しやすい
- ⑫ もっと話そうという気持ちになる

以上に見てきたように、自分が話しているときに相手の相づちがあるか(3-1-2)ないか(3-1-1)によって、どのような気持ちになったかという話し手としての経験から、相づちを使う理由がたくさん述べられた。

3-2. 聞き手としての経験から

日常的に友だちと会話をする中で相手の話を聞きながら自分がどのような反応をしたかを思い返したり、桜美林大学の「オーラルコミュニケーション」という授業で「相づちを打たないで相手の話を聞く」という実習で聞き手になったときの経験を振り返ったりしながら、相手が話しているときに聞き手としてどのように振る舞うのが望ましいかということについて述べた回答をまとめる。すなわち、聞き手の立場から相づち使用の理由を述べたものである。

3-2-1. 会話における聞き手の役割

相手が話しているときに反応を返すのは、聞き手の役割であり、相づちによって話し手に「ちゃんと聞いているということ」、「伝え」たり「アピール」したりするのは当然であるという。具体的な記述は次の通りである。

- ① ちゃんと聞いているということを伝える
- ② ちゃんと聞いていることをアピールする

「聞いている」ということだけでなく、相づちによって、さらに次のようなことも伝えようとするという。

- ③ 理解(しようと)していることを伝える
- ④ 同意を表わす
- ⑤ 共感していることを伝える
- ⑥ 興味を持っていることを示す
- ⑦ 驚き、疑問、喜び、あきれなどの感情を伝える

①～⑦に見られるように、相づちを打てば、「聞いている」、「理解している」、「同意している」、「興味を持っている」など、聞き手としてのいろいろな心情を伝えられるという相づちの役割を考え、相づち使用の必要性を述べている。

さらに、聞き手はただ受身的な「聞き役」というだけでなく、話し手と共に会話を成立させる役割があり、その役割が相づちを打つことによって果たせるということへの言及も見られる。

- ⑧ 沈黙を防ぐため
- ⑨ 相手がゆっくりペースで話しているときは、その間をうめる
- ⑩ 相手に話の先を促す
- ⑪ 話の流れをコントロールする

以上に見てきたように、聞き手の相づちが話し手の話す意欲を支え、会話を成立させる一端を担っているということから、相づちは必要であると考え、聞き手としては相づちを打つことが役割であると考えているようである。

3-2-2. 相手（話し手）に対する相づちの貢献

聞き手は、相づちによって「聞いている」、「理解している」、「同意している」、「興味を持っている」というようなことを伝えながら「聞き役」をつとめ、さらには相づちによって会話のペースや内容をコントロールしながら話し手と共に会話を成立させることもあるという記述を見てきたが、さらに相づちには話し手に対する積極的な貢献があるということについての記述もあり、それを以下にまとめることにする。

- ① 相手が話しやすくなるように
- ② 相手に気分良く話してもらいたい
- ③ 相手が楽しく話せるように
- ④ 相手が不安な気持ちにならないように
- ⑤ 相手が話すことだけに集中できるように
- ⑥ 相手が嫌な気分にならないように

上記の回答はどれも、聞き手である自分が相づちを打てば、相手は話し手として気持ちよく話を進めることができるということであり、聞き手として相づちを使うことに積極的な理由を見出しているといえる。

3-2-3. 自分（聞き手）にとっての相づちの貢献

相手の話を聞きながら相づちを打つと、

- ① 考える時間ができる
- ② 相手と波長をあわせる

というように、話し手とともに会話を作り上げていく楽しさや協調感を持つことができるという回答も見られた。さらには、相づち使用によって、次のように自分の存在や聞き手としての評価につながるという期待を持っているようでもある。

- ③ 自分の存在を示す
- ④ 聞き上手になりたい
- ⑤ 良い聞き手だと思われたい

ここまでに見てきた相づち使用の理由は、相づちを打つことが、聞き手の役割でもあり、話し手に対する貢献もあり、聞き手にとっての貢献もあるという面で、聞き手としての会話への積極的参加の姿勢が見られるものであったが、一方で、相づちのこのような機能を逆手にとって、次のような理由を述べる記述もあった。

- ⑥ 聞いていないと思われたくない

- ⑦ 聞き流していると思われたくない

そのため、聞く気の有無に関係なく、相づちを打つこともあるという次のような記述もあった。

- ⑧ 興味の有無にかかわらず適当に相づちを打って話を流す
- ⑨ 聞いていなくても聞いていると相手に感じさせることができる
- ⑩ 納得していないときも打つ

ただし、聞く気がないときには、小さなリアクションで、元氣なく、相手を見ないで相づちだけを打つというように、積極的な相づちとは異なる非言語行動とともに使っているようである。

3-3. 自分の事情に由来する理由

話すことがあまり好きではない、または、あまり得意ではないタイプの学生にとって、相づちは必要不可欠なコミュニケーション手段であるという記述が見られた。

- ① 話すのが不得手なので、相づちを打つことが多い
- ② 無口なので聞いていないと思われたくないから、相づちが必要
- ③ 話すのが得意でなく、うまく言葉で返すことができないので、相づちが必要

上の記述に見られるように、「話すのが不得手」で「無口」だと「うまく言葉で返すことができない」ため「聞いていないと思われ」かねないので、それを避けるために「相づちが必要」であるという。これに対して、次の④に見られるように「人の話を聞くのが好き」なので、積極的に「聞き役」になって相づちを使うというタイプの学生もいる。

- ④ 人の話を聞くのが好きで、聞き役になることが多く、相づちが必要

一方、話すことが好きなために、自分が一方的に話すことにならないように、相手も気持ち良く話せるようにという気遣いを、相づちに託しているタイプの学生もいるようである。

- ⑤ 話し好きのため、他の人より話そうとしてしまうため、他の人にも気持ちよく話してもらおうようにするには相づちが大事

次に、人の話に耳を傾けることが得意でなく、人の話を聞き流すタイプの学生は、次の⑥のような理由で相づちを使用している。

- ⑥ 人の話を聞き流してしまうことがあるので、相づちを意識的に打つようにすれば、相手の話とタイミングをきちんと聞いていなければならない

相づちには、適切な表現形式とタイミングがあることを考えると、ただ打っていけばよいというわけではなく、相手の話をよく聞いて、適切に打たなければならない。相づちを意識して打とうとすれば、相手の話をよく聞く必要があり、結果的に聞き流すことが防げるというわけである。

3-4. 相づちに対する考えに由来する理由

相づちに対する考えを、相づち使用の理由としてあげた回答が、次のように見られた。

- ① 一緒に会話をしているわけだから相づちは大切であり、相づちがないと、次のようになる。

- ② 相づちを打たずに聞くのは失礼
- ③ 相づちがないと会話がはずまない

逆に相づちがあれば、次のようになる。

- ④ 相づちで会話がはずむ

- ⑤ 相づちで話が盛り上がる。
- ⑥ 相づちで会話がスムーズになる

さらに、相づちの機能を積極的にとらえた⑦～⑨のような記述がある。

⑦ 相づちは言葉では伝えきれない感情を伝えるコミュニケーション手段であり、

- ⑧ 相づちがあればお互いよりよいコミュニケーションができる

- ⑨ 相づちはコミュニケーションにとっても重要な役割をしている

したがって、

- ⑩ いつも相づちをしっかりと使っていきたい

と述べている。

友だちとの日常会話において意識的に相づちを使うことは多くはないと思われるが、相づち使用について振り返ってもらくと、3-4 で見たように学生たちの相づち観が述べられ、これらはどれもいわゆる「日本語の相づち」と共通しており、学生特有、あるいは、若者特有の相づち観があるわけではなさそうである。

4. 相づちの表現形式

4-1. 日本人学生の相づちの表現形式

日本人学生たちが相づちとして使用している表現形式のバリエーションは、120 種類である。いわゆる相づち詞の「ウン」「ウンウン」「ハイ」「ソウ」「アア」「エ」「ヘエ」「フーン」「ソウダネ」などはすべて使用されているが、中でも「ウン」と「ウンウン」が圧倒的に多い。以下には、従来あまり代表的な相づちとされてこなかったものを、取り上げることにする。

「ソウナンダ」が 14 例あった。相手の発話の一部を繰り返して「・・・ンダ」と相づちを打つ用法は、以前は相づちとして使用されることはなかったが、近年急激に増加し、特に相手の発話を繰り返さずに「ソウ」で代用する「ソウナンダ」は、現在はかなり幅広い年齢層で使用されているといえるだろう。

「ナルホド」が 9 例あった。「ナルホド」は以前から相づちとして使用されているが、これは「概念的表現」と分類されることもあり（小宮 1986）、使用者も限られていた。すなわち、やや年配の男性が、相手の話の内容を理解した上で、あるいは納得した上で打つ相づちとされていた。1982 年に NHK で放送された「若者ことばがわかりますか」という番組の中で、若者の相づちとして 1970 年代には「ホント」が使われ、1970 年代末から 1980 年代には「ウソ」も使われるようになったという報道に対して、60 歳代後半のドイツ学者が「私などはナルホドを使いますねえ」と言っている。このように当時は「ナルホド」は年配の男性が使う相づちだった。しかし、現在は、若者や学生が多く使用し、また、相手の話の内容に対する理解や納得を示すわけではなく、場合によってはやや否定的な気持ちを表す用法が多く見られる。¹

¹田中香織氏（ヤギェロン大学）より、相づちとして「ナルホド」を使うと後に否定がくることが多いという指摘をいただいた。実際田中氏は日本語の授業で、学習者の答えが正しいときは、「ハイ」と言い、正しくないときは、すぐに否定はしないが、「ナルホド」とか「ウン」と反応するため、学習者はそのことを知っていて、教師が「ナルホド」と言うと、喜ばないという実例を提供してくださった。

「マジカー」あるいは「マジデー」が 7 例あった。「まじ」は若者ことばの代表的なもので（堀口 2012）、副詞的用法が主であるが、相づちとしての用法も増えているように見受けられる。

「ワカル」と「タシカニ」が、いずれも 6 例あった。理解や共感をはっきりと示して、コミュニケーションを円滑に進め、ひいては人間関係も良好に保とうとする相づち使用といえるだろう。

4-2. 留学生の相づちの表現形式

留学生たちが相づちとして使用している表現形式のバリエーションは、14 種類である。日本人学生の使用が圧倒的に多かった「ウン」と「ウンウン」は使用されていないようである。中国語にも「ウン」に近い発音の相づちがあるが、それは「ア」に近い発音の相づちに比べると丁寧度が高いため、友人に使うことは少ないという。そのことが影響して、日本語で話す場合にも、友人に「ウン」を使うことはあまりないようである。

4 名の留学生が使用している相づちとしてまずあげたのは、「ハイ」、「ソウデスネ」、「アーソウデスカ」、「ソウデスカ」で、これらは日本語の授業で習ったものである。日本語の会話は相づち無しで進めることができないため、日本語の授業でも、会話では相づちの必要性を説き、いくつかの表現形式を使ってタイミングとともに相づちの練習をすることが多くなっている。その際に提示される相づちが、「ハイ」、「ソウデスネ」、「アーソウデスカ」、「ソウデスカ」などである。

4 名の留学生はその他に、「ソウカ」、「ソウナンダ」、「ナルホド」、「ホントウニ」、「ソレデソレデ?」、「大変ダヨネ」などを使用しているが、これらは日本人学生と話している間に身に付けたものであるという。

その他に、「ソンナコトナイデス」、「サスガデスネ」、「オツカレサマデス」、「ガンバッテクダサイ」などを、よく使う相づちとしてあげている。これらは日本社会の中で、特にアルバイトをしながら身に付けたものであるという。

5. まとめ

反応が少ないとか、人の話を聞かないと言われている学生たちが、友だちと話すときには、かなり相づちを使っているという意識を確認することができた。日本人学生 61 名と留学生 3 名が相づちを使うと回答し、相づちを使わないのは留学生 1 名であった。

相づちを使う理由については、大きく分けると、1. 話し手としての経験から、2. 聞き手としての経験から、3. 自分の事情に由来する理由、4. 相づちに対する考えに由来する理由、の 4 つの点から述べられている。話し手としての経験からは、相手からの相づちがないと不安になり、楽しく会話を進めることができないが、相づちがあると、話しやすくなり、気持ちよく会話をすすめることができるということ、相づち使用の理由としてあげている。聞き手としての経験からは、相手の話を聞いているということを伝えるのは聞き手の役割であり、それによって話し手とともに会話を作り上げていくことができるということ、相づち使用の理由としてあげている。自分の事情に由来する理由としては、自分の無口を補ったり、聞くことが好きだという特性を生かして良い聞き手になったり、あるいは自分の話し過ぎを抑えることができるということ、相づち使用の理由としてあげている。相づちに対する考えに由来する理由からは、いわゆる「日本語の相づち」の役割を認識していることが示された。

相づちの表現形式には多くのバリエーションがあり、その中には従来から相づちとして使われてい

るものもあれば、以前は使われていなかった形式が相づちとして多用されているものもある。また、留学生は、日本語の授業で習った形式だけでなく、日本人の友人から学んだものや、日本社会の中で身に付けたものなども、どんどん使おうとしている。

学生たちは、友達から嫌われることを非常に恐れ、よい関係を築き、それを保ち続けることを強く望んでいる。そのためには、会話において適切な相づちを打つことも重要なことであると認識していることが明らかになった。

参考文献

- 穂田照子(2009)『『聞く』『聴く』『訊く』: 3つの『きく力』を育む取り組み』『Obirin Today 教育の現場から』9号, 97-112
- 大浜るい子(2006)『日本語会話におけるターン交替と相づちに関する研究』溪水社
- 小宮千鶴子(1986)「相づち使用の実態—出現傾向とその周辺—」『語学教育研究論叢』大東文化大学語学教育研究所
- 高岸美代子(2012)「ケータイメール世代のあいづち使用—女子高校生の自由会話から」『社会言語科学会第29回大会発表論文集』
- 堀口純子(1997)『日本語教育と会話分析』くろしお出版
- 堀口純子(2012)「学部留学生が日常生活で体験する日本語のバリエーション」『日本語教育連絡会議論文集』vol. 24 , 75-82.